

高齢者における近隣からのソーシャル・サポート選好に関する研究の課題

林 孝 之

高齢者における近隣からの ソーシャル・サポート選好に関する研究の課題

Problems of research on social support preference by elderly from neighbors

林 孝 之

1 目的

わが国において、家族や近隣との支え合いが縮小している。核家族化、小家族化の進行により、家族による扶養機能が低下している。高度経済成長にともなう工業化・都市化などにより、地域における隣近所の助け合いが減少している。

家族や近隣の支援機能の低下にともない、公的サービスや民間サービスが発達している。しかし、それらのサービスを利用できず、生活に必要な支援が不足し、孤立死などの深刻な生活問題につながるケースが、高齢者を中心に多く見られる。公的なサービスや市場からのサービスを利用するためには、利用方法についての情報、利用料を負担するための経済力、利用の意思表示などが必要である。一方、多くの人は高齢期において、加齢に伴う心身機能の低下や、定年退職に伴う収入の減少に直面する。中には、自力で必要なサービスを選択し、利用料を支払うことが困難なケースがある。

そこで地域福祉は、隣人たちとの社会関係を基盤とした、地域における支え合いの構築を目指している。これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書¹⁾（厚生労働省2008）は、隣人たちとの社会関係を基盤とする地域

において、住民が隣近所の見守り声かけ、そしてボランティアやNPO、住民団体による活動などを通じて積極的に住民支援にかかわることを強調している。

しかし、高齢者は地域における支え合いに対して、必ずしも肯定的とはいえない。河合（2010）は、「孤立している高齢者のなかには、あらゆる社会的関係を拒否して暮らす層が一定数いることに注意する必要がある」と指摘する。内閣府（2007）「第7回 高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」においても、わが国の高齢者における「同居の家族以外に頼れる人」としてもっとも割合の高い人は「別居の家族・親族」（60.9%）であった。「近所の人」とであると答えた高齢者の割合は、わずか18.5%であった。これは、諸外国の高齢者が「近所の人」とであると答える割合（アメリカ23.7%、韓国23.1%、ドイツ38.2%、スウェーデン26.5%）と比べても低い。

隣人たちとの社会関係を基盤とした、地域における支え合いの構築を目指すならば、高齢者の近隣住民からサポートに対する選好に、注目する必要がある。なお、ここでいう選好とは、高齢者のサポートに対する主観的な選択のことである。

本稿は、おもにわが国における高齢者のソー

シャル・サポート選好に関する研究の動向を、初期（1990年代から2000年代初頭）、および近年（2000年代初頭から現在）の2期に分けて概観し、近隣からのソーシャル・サポート選好に関する研究を進める上での課題について考察することを目的とする。

2 高齢者のソーシャル・サポート選好に関するわが国の研究動向

1) 初期の研究動向

高齢者のソーシャル・サポート選好に関する初期の研究に、Cantor (1979) の「階層的補完モデル (hierarchical-compensatory model)」(Cantor 1979: 434-463) がある。Cantor (1979: 453) によると、このモデルは「サポートの構成要素の選択における選好 (preference) の順序を仮定する」ものであり、「現在の一般的な高齢者の価値体系において、家族がもっともふさわしいサポートの提供者とみなされ、次にその他の他者、そして最後に公的機関が提供者とみなされるのである」というものである。

「階層的補完モデル」は、Litwak (1985) の「課題特定モデル (task-specific model)」(Litwak 1985: 36-37) と比較して用いられることが多い。Litwak (1985: 36-9) によると、このモデルは「(夫婦や別居家族、友人、近隣、公的機関などの) グループは、それらの構造的特質に調和した課題について効果的に扱う」というものである。たとえば隣人は「地理的接性の高さ」、家族は「継続的なつながり」、友人は「情緒的に結束するつながり」といった特質があり、「ひざを付き合わせた継続的な接触」という課題に対しては家族や近隣が扱い、長期間のかかわりについては家族が扱うことが有効である、ということである。

「階層的補完モデル」は、「課題特定モデル」とともに、わが国の老年社会学研究や社

会心理学研究など、高齢者の社会関係やケアに関心のある領域において検討された。

それらのおもな結果は、すべての高齢者が家族をプライマリーな支援者として選好するわけではなく、高齢者の属性などの状況や、求めるサポートの内容によって選好がことなる、ということだった。たとえば、古谷野 (1990) は、大阪府狭山町の寝たきり高齢者とひとりぐらし高齢者を対象に調査結果から、寝たきり高齢者については、日常的支援と介護的支援にいずれについても、支援の源泉としては子ども (別居子) が最も多く選ばれたなど、階層的補完モデルによる説明が有効であるが、ひとりぐらし高齢者の日常的支援の源泉については、近隣やその他が一定の割合を示していたなど、課題特定モデルによる説明が有効であることを示した。また、野邊 (2005) は、高梁市の高齢女性を対象にした調査結果から、「上位層の他者の次位にある間柄の他者と適合性が高い課題であれば、序列に従って補完が行われるけれど、より下位にある特定の間柄の他者と適合性が高い課題であれば、上位層の他者にサポートを期待できないとき、その下位にある特定の間柄の他者によって補完される」といった。両モデルが相対するものではなく、相互補完的なものであるという結果が示された。

しかし、それらの知見をソーシャル・サポートの選好に関するものとして取り入れるには、いくつかの問題がある。まず、それらの結果が、高齢者のソーシャル・サポートの選好を示すものなのか、ということである。古谷野 (1990) や野邊 (2005) が測定したサポートは、「あるサポートをしてくれそうなのか」という、野口 (1991) のいうところの「予期」に相当するものと考えられる。ソーシャル・サポートの「予期」については、「期待されたサポート」とも呼ばれることがある。古谷野 (1990) の「日常的支援」とは、「うちとけて話すことができ、カゼなどで2～3日寝

込んだとき、買い物などを頼める人」と表現される。また、野邊（2005）は調査方法について「サポートをそれぞれ期待できる相手の名前をすべて挙げてもらった」と説明する。一方、ソーシャル・サポートにおける選好は、「予期」（「期待されたサポート」）とは異なる概念である。前田（1991）は、ソーシャル・サポートの分析においては、サポートの選択と実際に行われているサポートとを区別する必要があることを指摘している。また、Pinquartら（2002）は、「入手できるにも関わらず、使うだろうと信じられていたサポートを使わないことを選好した多くの回答者がいることから、高齢者の将来のサポートに対する選好は、サポートの利用可能性を超えて役に立つ概念であると判断する」という。つまり、ソーシャル・サポートの選好は、サポートに対する期待や実行されたサポートなどとは異なる概念であり、上記の知見がソーシャル・サポートの選好の特徴を示すものとは必ずしもいえないのである。

次に、選好に関する主要な理論である「階層的補完モデル」と、「課題特定モデル」を相互補完的にもちいても良いのか、という問題がある。前田（1999）は「階層的補完モデル」は選好に関する理論モデルであるが、「課題特定モデル」は選好に関するモデルではなく、サポート源の役割や課題遂行について示すものである、という。

また、初期のソーシャル・サポート選好に関する研究では、フォーマルなサポート源も含めた包括的な検討があまりなされていなかった。Cantor（1979：453）は、ソーシャル・サポートの選好について「現在の一般的な高齢者の価値体系において、家族がもっともふさわしいサポートの提供者とみなされ、次にその他の他者、そして最後に公的機関が提供者とみなされるのである」と、フォーマルなサポート源も含めて言及していた。しかし、初期のソーシャル・サポート選好に関する研

究は、家族や近隣などのインフォーマルなサポート源についての検討が中心になされていた。その理由は、この時代のソーシャル・サポート研究の多くは、ソーシャル・サポートの提供者をインフォーマルな主体に限定してとらえていたためであると考えられる⁽¹⁾。

2) 近年の研究

近年の高齢者のソーシャル・サポート選好に関する研究は、選好についての操作的概念の設定、フォーマル・サポート源も含め、選好に影響を与える要因について幅広い検討がなされている。

権ら（2004）は、選好を「日常生活において、手段的および情緒的な面で何らかの援助が必要になったとき、そのような支援をだれに、どの程度求めたいのかという個人の主観的判断」と定義した。サポート源として「家族、親戚、近隣・友人、ボランティア、行政、福祉機関」を、サポートの内容として、手段的サポートと情緒的サポートを設定した。おのおのの選好について『①「まったく求めない（1点）」～⑤「非常に求めたい（5点）」』という尺度（選好度）を用いて、大阪市の65歳以上高齢者2000人を対象に調査を実施した。結果、高齢者のサポート源に対する選好は、おもに、「行政」、「福祉機関」、「ボランティア」を含む「フォーマル・サポート源」、「近隣・友人」、「親戚」を含む「家族以外のインフォーマル・サポート源」、そして「家族」を含む「インフォーマル・サポート源」という3つの構造をもつということだった。また、手段的サポートは「フォーマル・サポート源」と「インフォーマル・サポート源」に求め、情緒的サポートは「インフォーマル・サポート源」に求めること、一方、いずれのサポートについても「家族以外のインフォーマル・サポート源」に求めないということだった。さらに、選好に関連する要因として、子供と同居、暮らし向きがよいなど「経済的・社会

心理的にリスクの少ない高齢者は「インフォーマル・サポート源」を選好すること、一方でひとり暮らし、低所得など、「経済的・社会心理的にリスクが高くなりやすい高齢者」は「フォーマル・サポート源」を選好すると指摘した。

山口ら（2008）は、高齢者が求める社会的なサポートを「ケア」とおき、「介護保険制度を中核とする制度化されたケア（FC）」と「FC以外の家族・地域住民・ボランティアなどによる制度化されていないケア（IC）」の組み合わせに注目した。選好については、「身体ケア」、「生活援助」、「相談」、「声かけ」の4つのケア内容をしてもらう場合について、それぞれ「すべてを私的なケアで」、「大部分を私的なケアで」、「私的なケアが中心だが公的なケアもある程度活用」（以上3つを「IC中心」）、「私的なケアと公的なケア半分づつ程度」（以上を「FCとIC半々」）、「公的なケア中心だが私的なケアもある程度活用」、「私的なケアと公的なケアを半分づつ程度」、「すべてを公的なケアで」（以上3つを「FC中心」）という操作的概念を設定した。それらを用いて、長野県A市60-74歳高齢者1059人を対象に調査を実施した。結果、「新興住宅地域居住者」は有意に「FC中心」を選択した、どのケア内容についても性別は有意な影響がなかった、伝統的なケアの志向などの「ケア規範意識」が弱いほど「FC中心」回答が高まった、8割以上の高齢住民がICを含んで選好していたことを示した。

また、山口ら（2010）は、のちの研究において、ICの担い手について「息子」、「娘」、「息子の配偶者」、「その他の親族」、「近隣の人」、「それ以外」（知人）という選択肢を設定し、東京都板橋区の65歳以上独居高齢者3500人を対象に、「近隣」や「近隣・知人」に対する、声かけ支援に対する選好の関連要因について検討した。結果、「子どもがいない人」、「所得階層が高い人」、「地域自治活動」への

参加が近隣への声かけ選好に関連することを示し、「住民が選好されるか否かは子供などの他の資源の多寡、サービス購入可能な経済的余裕度や、これまでの社会ネットワークのかかわりなど複数の要因が複雑に絡んでいる」と述べている。

近年の高齢者のソーシャル・サポート選好に関する研究については、まず、選好について操作的概念を設定していることが指摘できる。「あるサポートをしてくれそうなのか」というサポートの「予期」を尋ねるのではなく、「誰に求めたいのか」、「してもらう場合誰がいいのか」という、選好の意味合いを操作化したワーディングを行っている。

また、近年の研究はフォーマル・サポートをサポート源に含み、介護などの手段的サポートについて、高齢者はフォーマルなサポート源に選好を持つなど、重要な知見を提供している。さらに、山口らはサポート源を組み合わせた場合の選好についても検討し、選好にかかわるサポート源についての議論を拡大している。

近年の研究は、高齢者のソーシャル・サポート選好に関連する要因について積極的に検討している点も特徴的である。ソーシャル・サポート研究においてその主要な要因とされている「性別」は、ソーシャル・サポートの選好においては要因としてとりただされず、経済的・社会的状況や地域特性、ケアに対する個人の意識などが規定要因として示されている。

さらに、近隣サポート選好を規定するものとして、経済的・社会的状況だけではなく、自治会活動参加などの、近隣とのかかわりが関連するという指摘も、重要な知見である。

3 考察

最後に、高齢者における近隣からのサポート選好に関する研究課題について考察したい。

まず、選好についての操作的定義については、先行研究にそったものを用いるのが妥当ではないかと考えられる。それらは、かならずしも多くの研究者において合意が得られたものではないが、「あるサポートをしてくれそうなのか」というサポートの「予期」を尋ねるのではなく、「誰に求めたいのか」、「してもらう場合誰がいいのか」という、個人の主観的な判断を尋ねている点においては、先に引用したPinquartら（2002）の指摘にも沿っている。

しかし、近隣サポート源に対する選好について研究を進める場合、サポート源の設定については検討されるべきだろう。先行研究においては、「近隣」を「友人」や「知人」を同じカテゴリーで分析している事例が見られる。浅川（2008）は「相互の選択に基づく親密な関係で結ばれ、興味や関心を共有しているのが友人」であり、近隣は「地理的近接性から生じた関係にある他者」と、両者を区別している。山口ら（2010）は、「近隣」と「近隣・知人」を分けて検討しているが、この視点は今後の近隣サポート源に対する選好に関する研究において、参考にするべき取り組みである。

また、近年の高齢者のソーシャル・サポート選好に関する知見は、高齢者はおもに家族やフォーマルサポート源からのサポートを求め、近隣や友人など、家族以外のインフォーマル・サポート源にはあまり求めないという、「階層的補完モデル」とは異なる結果を示している。今後の高齢者におけるソーシャル・サポート選好に関する研究は、「階層的補完モデル」をふまえつつ、高齢者の選好に影響を与える要因は何かを検討する段階にある。検討すべき要因としては、経済的・社会的状況や地域特性、ケアに対する個人の意識などがあげられるが、特に、近隣サポート源に対する選好に関連する要因については、自治会活動などといった近隣とのネットワークを

形成する可能性のある社会活動について、詳しい検討がなされるべきである。近隣からのサポート選好に関連する要因となる活動が特定できれば、地域福祉実践に応用可能な知見を提供することができるだろう。

註

(1) たとえば小松（1988）は、ソーシャル・サポート・ネットワークを「専門職ではない、インフォーマルな援助者、家族、友人、隣人、地区の世話人などの素人の援助者」ととらえていた。

文献

- 浅川達人（2008）「高齢期の人間関係」古谷野亘、安藤孝敏編『改訂・新社会老年学』ワールドプランニング。
- Cantor, M. H. (1979) *Neighbors and Friends: An Overlooked Resource in the Informal Support System*, *Research on Aging*, 1 (4), 434-463.
- 厚生労働省（2008）『地域における「新たな支え合い」を求めて：住民と行政の協働による新しい福祉：これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告』
(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7.html>, 2009. 8. 1).
- 古谷野亘（1990）「在宅要介護老人のソーシャル・サポート・システム：階層的補完モデルと課題特定モデル」『桃山学院大学社会学論集』24 (2), 113-124.
- 河合克義（2010）「高齢者の社会的孤立の実態と孤立防止策のあり方」, 全国社会福祉協議会『月刊福祉』93 (9), 18-21.
- 権 玆珠, 岡田進一, 白澤政和（2004）「大都市在宅高齢者のソーシャルサポート源に対する選好度の特徴—手段のサポートと情緒的サポートにおける類似点と相違点」, 日本社会福祉学会『社会福祉学』44 (3), 52-61.
- Litwak, E. (1985) *Helping the elderly: the complementary roles of informal networks and formal systems*, The Guildford Press. p36-37.
- 小松源助（1988）「ソーシャル・サポート・ネットワークの実践課題」, 鉄道弘済会『社会福祉研究』42, 19-24.
- 前田尚子（1991）「老人のソーシャル・サポート・

- リソース選択について], 日本家政学会『家族関係学』, 10, 23-33.
- 前田尚子 (1999) 「非親族からのソーシャルサポート」, 折茂肇 編『新年老年学』 東京大学出版会, 1405-1415.
- 野邊政雄 (2005) 「地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性」, 日本社会心理学会『社会心理学研究』 21 (2), 116-132.
- 内閣府 (2011) 「第7回 高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」
(<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/index.html>, 2011, 8, 20)
- 野口裕二 (1991) 「高齢者のソーシャルサポート—その概念と測定」, 東京都老人総合研究所『社会老年学』 34, 37-48.
- Pinquart, M., Sorensen, S., (2002) *Older adults' preferences for informal, formal, and mixed support for future care needs: a comparison of Germany and the United States*, International Journal of Aging and Human Development, 54 (4), 291-314.
- 山口麻衣, 冷水豊, 石川久展 (2009) 「フォーマルケアとインフォーマルケア組み合わせに対する地域高齢住民の選好の関連要因」, 日本社会福祉学会『社会福祉学』 49 (2), 123-134.
- 山口麻衣, 冷水豊, 齊藤雅茂, 他 (2011) 「大都市独居高齢者の近隣住民・知人による声かけ・安否確認に対する選好」, 日本地域福祉学会『日本の地域福祉』 24, 21-31.